

身近なトリに目を向けて！

かとう
加藤 ゆき(学芸員)

はじめに

砂漠や極地といったごく一部の環境を除き、様々な地域で見ることができるトリは、ヒトにとって身近な生き物といえます。この原稿をまとめるにあたり、知人に「あなたにとっての身近なトリは？」と聞いたところ、カワラバト(図1A)とカラスと即答した人もいれば、少し考えてからメジロと答えた人もいました。このほかにセグロセキレイ、ヒヨドリ(図1B)、アオサギ(図1C)、シジュウカラ、カワウ、メジロなどが挙げられました。なかには、子どもの頃はオナガだったけれど大人になってからはムクドリ、と具体的に答えた人もいました。

一年を通して見られる種が多く、身近なトリは人それぞれだと思いました。一方で、人家周辺で見られるスズメ(図1D)やツバメ(図1E)、様々な環境に生息するカラス、駅や公園などで見かける機会の多いカワラバトは、ごく少数意見でした。

トリは地域や環境、季節によって見られる種類は異なります。特に日本は南北に長く、また標高差もあることから、住環境や活動範囲によって生息している種類は様々です。さらには、トリに対する興味や関わり方によっても身近だと感じる鳥は大きく異なってくるでしょう。ここでは、

ヒトが暮らす環境に生息しているにもかかわらず、身近だと認識されていないトリの現状を紹介します。

スズメは身近ではない？

スズメは小笠原群島を除く北海道から南西諸島にかけて、主に留鳥として分布します。農耕地や市街地、住宅地などヒトが居住する近くに生息し、樹洞のほか人家の軒や瓦の間、電信柱や信号機の腕金や巣箱などを利用して繁殖し、冬になると雑木林や竹林、駅前の街路樹に集団でねぐらを作ります。日本野鳥の会神奈川支部がまとめた『神奈川の鳥2011-2015』(以下、目録と表記)によると、県内にも留鳥として広く分布しますが、県西部の山地では、人家や観光施設が集まっている地域を除き、森林環境での観察事例はほとんどありません。このように主に街中に生息している本種は、ヒトとともにくらしているといっても過言ではないでしょう。

それでは、なぜ身近な種として挙げられなかったのでしょうか。一つは生活サイクルによるものではないかと考えられます。本種は長い間、長距離の移動をせずにはほぼ同じ地域でくらしていると考えられていました。しかし、標識調査に

より、100 km以上もの渡りをする個体がいることが明らかとなりました。また、春から夏にかけての繁殖期には、番に分かれて人家周辺で行動し、冬季は群れを作り、まとまった数がねぐらや農耕地等で見られます。つまり、季節によって生息環境や観察される個体数が異なるため、観察機会が変動するのです。

もう一つは、生息個体数の減少によるものではないかと考えられます。植田・植村(2021)によると、過去3回にわたり全国で実施した鳥類繁殖分布調査において、ほぼ同じ経路で調査できた1,947地点の結果を集計、年代別に比較すると、1990年代と2010年代とでは総個体数(調査経路で確認した個体数の総計)が1万羽以上減少した、とありました。全国的な分布状況はほとんど変わっていないことから、全体的に生息個体数が減少したと思われます。

本県での具体的な生息数のデータはありませんが、近ごろ見かけなくなったね、という声をよく聞きます。スズメというどこにでもいる鳥というイメージが強かったのですが、もしかしたら近い将来、本種の保護に取り組まなければならない日が来るかもしれません。

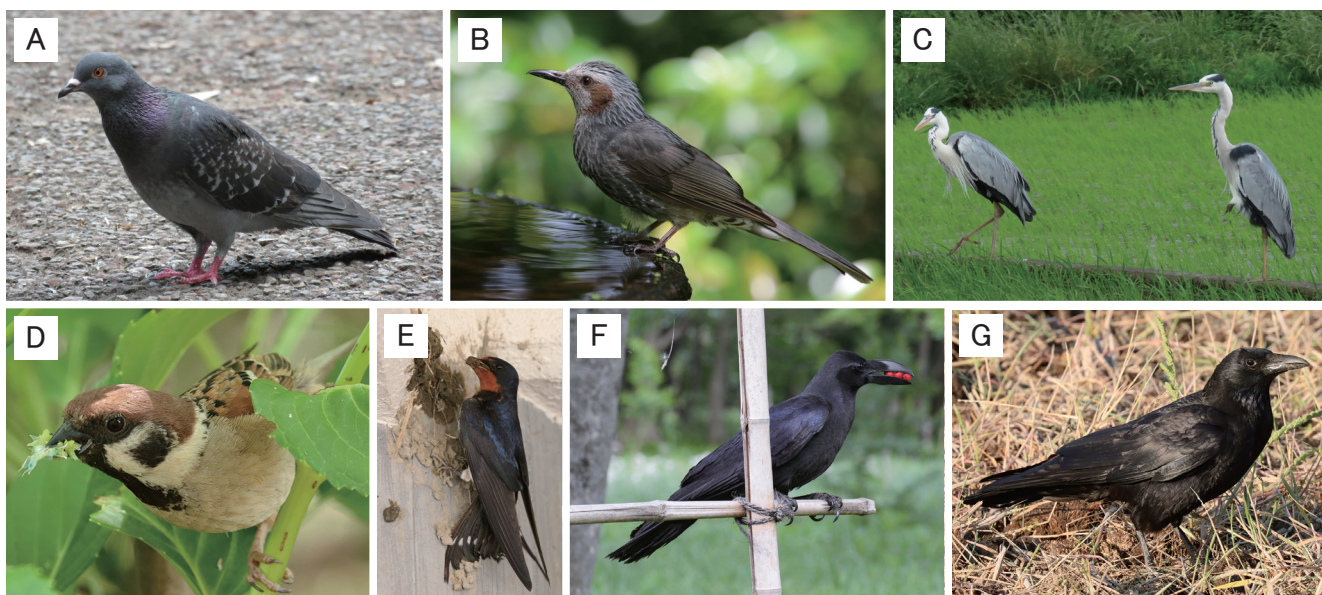


図1. ヒトの身近な環境にくらす代表的なトリ。A: カワラバト, B: ヒヨドリ, C: アオサギ, D: スズメ, E: ツバメ, F: ハシブトガラス, G: ハシボソガラス。A・C・E: 加藤ゆき, B・D・G: 重永明生, F: 田中徳久撮影。

減りつつあるツバメ

ツバメは北海道から奄美大島にかけて夏鳥として渡来し、九州南部などの暖かい地方では越冬します。平地から山地にかけての農耕地や市街地、河川敷で見られ、家の軒先や、北海道では牛舎きゅうしゃや厩舎で営巣をします。

本種もスズメと同様、ヒトとともにくらししているトリですが、なぜか身近な鳥としては挙げられませんでした。多くの地域で夏鳥として渡来するため、季節によっては見られないことに加え、生息数の減少が理由として考えられます。

全国的な分布に変化はありませんが、1990年代と2010年代とでは総個体数が6千羽ほど減少しました。(植田・植村, 2021)。その要因として、ヒトの生活変化によるものが大きいとされています。身近だった里山の自然が宅地化などで減り、農業の衰退により畑や水田が減少し、エサとなる昆虫が少なくなっていることが考えられます。エサの減少は、個体の生存率だけではなく子育ての成功率にも影響します。

本種は人家の軒先などに、唾液を混ぜた泥を壁面に付けて巣を作りますが、最近の家屋では軒のないものや、壁面が加工されて巣が作りにくいものも多く見られるようになりました。一部では、ヒナが落とす糞を嫌がってツバメが入れないように玄関に網を張ったり、なかには巣を壊したりする事例も報告されています。このような状況から生息数の減少が起きているのでしょう。このままではスズメと同様に保護が必要となる日が来るかもしれません。

ヒトとの軋轢 カラス2種

日本にはハシブトガラス(図1F; 以下、ハシブトと表記)とハシボソガラス(図1G; 以下、ハシボソと表記)が留鳥として生息しています。いずれも外見が黒一色のため同種だと思われがちですが、鳴き声やくちばしの形状が異なり、ハシブトの方が体が大きめです。生息環境等も異なり、ハシブトが北海道から沖縄県にかけての島嶼部も含めた森林や海岸、市街地に生息するのにに対し、ハシボソは北海道から九州にかけての農耕地等のひらけた場所を好み、島嶼部では見られま

せん。ハシブトは島でも見られる森や都会のトリ、ハシボソは島にはいない農耕地のトリと言ってもよいでしょう。

ただ、近年は農耕地で、ハシブトを見かける機会が増えました。おそらく、畑や水田などが耕作放棄された結果、荒地になり、ひらけた環境を好むハシボソが減少、代わってハシブトが入りこんできたのでしょう。

このように、種ごとのすみわけは見られるものの、一般的にカラスは森林等の自然度が高い環境だけではなく、人家周辺や農耕地でも見られるわけですが、なぜか身近だと感じられていません。これにはヒトの生活へのかかわりが大きく影響していると考えられます。

例えば、多くのヒトが暮らす都会では、ごみ置き場を荒らす、ねぐら近くでは鳴き声がうるさい、といった生活面での被害が報告されています。さらに、カラスは農作物に被害する代表的なトリとされています。果樹や野菜の食害に加え、植えたばかりの苗を引き抜くなどの“いたずら”とも思える行為、ビニールハウスの被覆ひふくをつついて穴を開ける、畜産飼料の盗食といった被害が発生している地域もあります。様々な環境においてヒトとの軋轢あつれきを生むことから、厄介者で身近にいてほしくないと考えられるようになり、結果として身近だと認識されていないのかもしれません。

身近かどうかはヒト次第 カワラバト

カワラバトはドバトとも呼ばれ、伊豆諸島と小笠原群島を除く全国に留鳥として分布し、一年を通して繁殖も確認されています。平地から丘陵地にかけての農村部から都市部に生息し、特に駅や公園で見かける機会の多いトリです。当館の前庭にも飛来し、カスケードで水浴びをしたり、日光浴をしたりしている光景を頻繁に見かけます。人家や観光施設が集まっている地域を除き、森林環境での観察事例はほとんどありません。

本種が身近だと感じられていない理由として、どこでも普通に見られること、あるいは外来種であることが関係していると考えられます。「身近なトリ」をイメージした時に、多くのヒトは「在来のトリ」を思い浮かべるでしょう。バードウォッチャーのなか

には外来種を観察しても記録として残さない人もいます。

全国的な生息数の減少により、観察機会が減っている可能性も考えられます。全国的な分布に変化はありませんが、1990年代と2010年代とでは、総個体数が6,031羽から2,539羽と大きく減少しました。餌付けをするヒトが減り、大きな群れにならなくなったことが原因の一つとして考えられています(植田・植村, 2021)。

しかし、目録では本県での減少傾向は見られず、個体数はほぼ横ばい状態だと思われます。そのため、観察機会の減少というよりも、ごく普通に生息しているために意識されていない、あるいは外来種であるがゆえに身近だと感じられていないことのほうが、要因として大きいと思われる。

身近なトリに目を向けて

ちょっとした環境の変化に敏感に反応するトリは、「環境のモノサシ」と言われることがあります。水辺環境を好むアオサギ、森林環境にくらすメジロやシジュウカラ、都市環境で見られるハシブトガラスやカワラバト、あなたはどのトリを身近だと感じたでしょうか？ そのトリは、あなたが暮らす身近な環境や、子どもの頃から慣れ親しんできた環境を反映しているかもしれません。あるいは、理想だと感じている環境にくらすものを無意識に思い浮かべているのかもしれません。

2024年2月から、動物たちの生態をテーマにした企画展を開催します。動物画家である藪内正幸氏により描かれた生態画を通して、身近なトリを含めた動物たちのくらしぶりはく製と共に紹介する予定です。ヒトと共にくらす多様なトリとその生態や生息環境に目を向けるきっかけとなってほしいと思います。

参考文献

- 日本野鳥の会神奈川支部編, 2020. 神奈川の鳥 2011-15: 神奈川県鳥類目録 VII. 685 pp. 日本野鳥の会神奈川支部, 横浜
- 植田睦之・植村慎吾, 2021. 全国鳥類繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021年. 184 pp. 鳥類繁殖分布調査会, 東京.